山東京傳作
栄花夢
後日話
金子先生造化夢
通油町
蔦屋版

自敘

李紳農を憫む詩に曰く『禾を鋤いて日午に當る。汗は滴る禾下の土。誰か知る盤中の飧。粒々皆辛苦。』と、宜なる哉、盤中の飧とは、一膳の水漬の飯といふことなり。米一粒布一寸といふとも何ぞ謾に用ゐんや。その恩須彌よりも高し。況や衣食器財屋室、人間一生日用の萬物を製し出すこと、幾萬人の辛苦を負ひけん。量り盡しがたし。是に於いて、偶李紳が詩を感ずるのあまり、三卷の稗史小說を作り、その大意を書して序となす而已。

寛政六甲寅孟陬

山東京傳題

自叙

李紳憫農詩曰。鋤禾日當午。汗滴禾下土。誰知盤中飧。粒々皆辛苦。宜哉盤中飧。一膳の水漬の飯といふと雖も米一粒布一寸といふとも何ぞ謾に用んや其恩須弥よりも高し況衣食器財屋室人間一生日用の萬物を製し出して。幾萬人の辛苦を負ん量也。於是偶李紳が詩を感ずるあまり三卷の稗史小說を作り其大意を書して序とするのみ而已

寛政六甲寅孟陬　山東京傳題

昔々赤本元年、かち〳〵山の兎のとしの頃、金々先生といふ者あり。その身貧にして人の富貴を羨しく思ひあけ暮此事をのみ悔み居たりしが、盧生もどきの榮華の夢を見てより、浮世は夢の如しと悟り、それも夢これも夢、寢ては夢、起きては夢、明けては夢、暮れては夢、牡丹餅を見て、ア、夢ぢやナア、茄子の香の物を見ては、ア、夢ぢやナアと何もかも夢にしてしまひ、あまり物を悟り過ぎて、これぞといふ商賣も渡世もせず、浮世を鰻屋の盤臺の如く見なして、たゞ明暮ぬらりくらりと暮しけるが、或時ひもじくなりける故、茶漬

を一膳してやらんと、手づから煮花を仕かけ、その茶の出來るうち、とろとろとやらかしける。

「お前のお姿は唐兒の胴へ練供養の稚兒の首をすげたやうだ。」

「こゝまで御座れ、甘酒進上。」

「そちが鼻は南京おこしの出來損ひときてる。」

金々先生の夢の見やう、餡細工の鶯の尻尾の如し。

「小人閑居して不善をなし、貧人閑居して手せんをなす」とは、まさにこれ此事ならん。

此外にもし寢言の文句御案じ御座候はゞ、御知らせ下さるべく候。早速書き入れ申候。

金々先生夢の中に一人の童子に誘はれ、何處ともわかぬ深山に來り、と見てあれば、四季の草花咲き亂れ、異香四方に薫じければ、又榮華の夢の二番目ではないか、ちと鬱陶しいぞと思ふ折柄、一人の仙人現はれ、金々先生に示して曰く、「汝さきに榮華の夢を見てより浮世の事は皆夢なりと悟り、これといふ世渡りの業をせず、これ大のいき過にて、悟らぬ時には劣りなり。なんぼ悟つても飯を食はねば、生きて居られず、すでに古語にも恒の產なきは恒の心なしといへり。吉田の兼好も、みづから蓆を織りて世渡とせしなり。まづしばらく此山に逗留すべし。汝が生悟りのあやまち

「さてはあなたはお仙人様で御座りますか、わたくしは又賣藥見世の胴人形かと存じました。

これは慥に夢で御座りませう、何故と申すに、あなたのお顏が、ぶしつけながら牡丹餅のやうだからさ。

みづから合點ゆくべし。」と仙人長口上のうち、金々先生はひだるくてどうもならず。「どうぞ御茶漬をさらさらとやらかしてからお示しをうけましたう御座います。」とぞ申しける。

仙人曰く

「汝飢に臨みたるよし、何ぞ食物を與ふべなれど、仙人は玉の屑を食ひ、霞や霧を飲んで食物となす故、人間に食はする物なし。暫く待て、おしつけ茶漬を振舞ふべし。」と。

さてさて仙人は氣の長き者なり。

金々先生が腹の加減思ひやられてあはれなり。

かくてかの仙人のお頭、多くの木の葉仙人に申しつけ　金々先生に食はする茶漬飯の支度をする。泥棒を見つけて縄を綯ふよりもちつとじれつてえよウと申す次第なり。仙人のお頭、金々先生を同道して此態を見せる。

柚の仙人山へ入り、茶漬の膳にこしらへる木を伐り出す。

「炭焼の仙人茶漬の煮茶を煮る炭をこしらへんと、中にてあらぼき枝を集める。

「ひだるいも通り抜けるとよいものかしてどうか耐へよくなりました。」

「おいらが商賣は野郎の啄木鳥ときてゐる。」
「まだ飯と茶をしかける水をくむ井戸側になる木と、釣瓶と、手桶になる木と、香の物を切る俎板、釜の蓋と、竈の側、庖丁の柄にする木、附木になる木まで切らねばならぬ。」
「木挽の仙人、杣の仙人が伐り出せし大木をひき割り、板にして膳をこしらへる仙人に渡す。
ずいかう〳〵、ずい功は細瑾の顧みず、此位悪い地口は人間の方にはなし。
きこりの仙人、
茶漬の飯を焚く薪を集める。

木地屋の仙人茶漬の膳の下地をこしらへて
塗師屋の仙人に渡す。塗師屋の仙人
漆屋の仙人より漆を買ひとりて
かの膳を春慶に塗る。これにも
まだ春慶下地の梔子を山から
とつて出す仙人もあり、
塗師屋の仙人の
使ふ刷毛をこしらへる
仙人もあり。そのさき
ざきを悉しく探せ
ば幾萬人の辛苦か、
數へ盡し難し。

「漆屋の仙人は、茶漬の膳へ塗る漆をこしらへる。これも山から漆を採り來り、漆の仙人の手へ渡るまでには、多くの仙人の手にかゝる事なり。その辛苦述べ盡し難し。

「ヲット盲仙人
杖の方〳〵、
これで
今日も
五度尻を突つかれる。漆屋は白澤と比目魚がうらやましい。背中に目があるから。」

「盲仙人得て漆屋の尻を

「早く仕事をしまつて、熱燗を一杯せしめ漆と出かけたい。」

箸屋の仙人、茶漬飯を食ふ箸をこしらへる。此箸屋の仙人、懐中箸の如く短き氣にて、角箸の轉んだ事にも腹を立ち、引裂箸の夫婦喧嘩、雑煮箸の太印など丶人をば雑箸の如く追ひつかひ、杉箸のあげ下しに、やかましき仙人なり。

「道通りの女仙人、中にはつがもなく上代物あり。これ等も不用の人に非ず、かやうな美しき仙女を天から見▲下して通りすがいにも此様な骨を折る職人の目を悦ばせ給ふなり。

つゝつくものなり。

燒物師の仙人、茶漬の茶碗と香の物の鉢と手鹽皿と、茶を煮る土瓶をこしらへる。これも土拵から藥の下地、びいどろを粉にして藥をかける、その辛苦いふに言葉なし。

金々先生ちひさい兒が竈へ薩摩諸を燻べて置いたやうに、早く〳〵とついて居てせがむ。はて、かうひもじくては茶碗も絲瓜もいるものか、早く賴む、賴む。腹の皮がびいどろのぽこぽんの尻を見るやうに へこ〳〵するわな。

「さて〳〵人間といふ者は氣の短い者だ。もう二三百年たつたら茶漬を食ふやうにならう、もちつとだ。耐へさつせえ。」

「丁稚の仙人お茶を汲む、茶腹も一時だ、お茶をあがれ。」

鍛冶屋の仙人は、金々先生に食はする茶漬の菜の香の物を切る庖丁、或は火箸、七輪の網などをこしらへる。これも鑛山から鐵を掘り出し、鍛冶屋の手へ渡るまでの辛苦をいはゞ、いかばかりなるか、はかり知り難し。

鍛冶屋の丁稚仙人は早く仕事をしまつて、屋臺見世をそゝり、眞鍮の薩摩諸、鉛の葡萄に銅の蜜柑、鐵の銅鑼燒をしてやらんと、それぞれの望みは仙人も人間も同じことなり。

釜屋の仙人は茶漬の飯を炊く釜をこしらへる。

「かま磨かざれば光なしだ。精出して磨かう、アハハ〳〵〳〵。何の可笑くもねえに、これがほんのおかまの前で笑ふのだ。」

百姓の仙人は茶漬飯の菜になる香の物の大根を作らんと、まづ大根の種を播く。この種を播くまでにも、畑をうない、肥料をかけ、大根になるまでの辛苦は更に譬へ難し。

又茶摘の仙女は茶漬の煮花になる茶を摘む。これも茶になるまでの辛苦いかばかりか知れず。

「茶摘の女中に見とれつゝ思はず茶の木に抱きついた粗忽な人さんぢや。チンツチヤンチヤンなどゝ、茶摘の仙女豪勢に浮く。

「早くこつちへ喜撰法師、わが庵は都

「種から大根をとらやア〳〵、なむから堪能と人間に聞えればいゝが。」

の茶摘しかぞすむよううぢ〳〵と埒のあかぬ子だぞ、しれつてえぞよう。」
「おさかさん、見物の散つた豆藏を見るやうに、笊を持つてまご〳〵しなさんな。」

金々先生に食はすべき茶漬の道具、まづ大抵揃ひけれども、まだ第一の米がなければ、百姓の仙人まづ田へ種をおろす。これ米を作る幕開の序開なり。

「仙人の親方金々先生を伴ひ、この態を見せる。

「此種播はすぎし頃と百姓が河東節でもあるまい。」

「あれが貴様に食はせる茶漬の飯になるのだ。」

金々先生曰く、

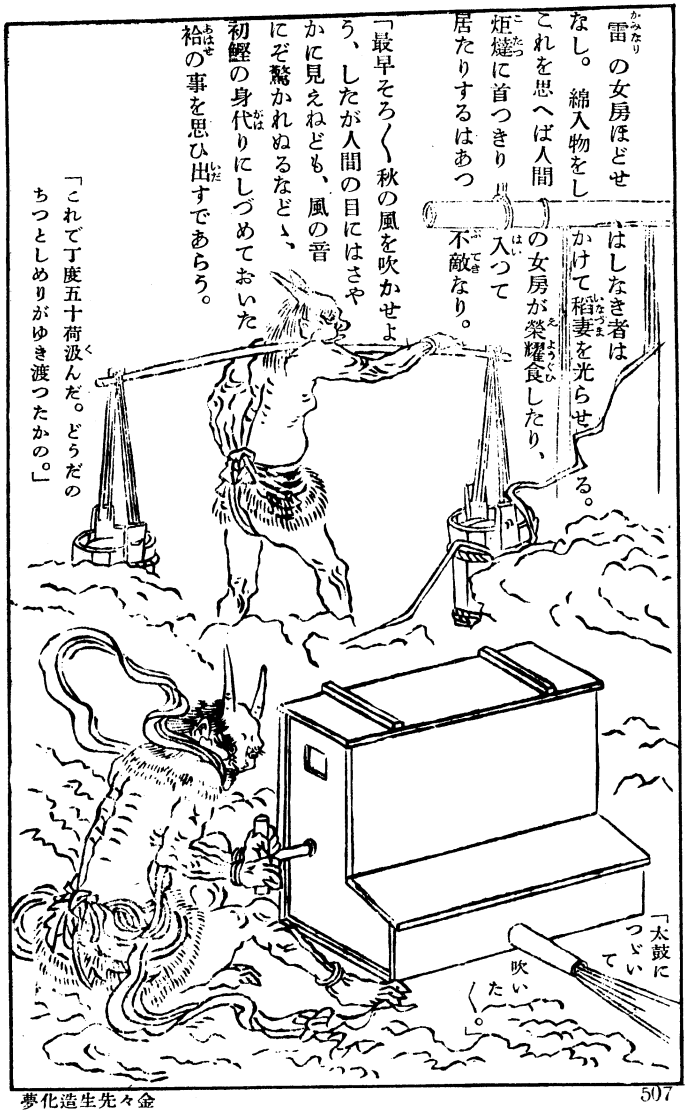
「最早わたくしもお前方の氣の長さには呆れかへつて腹が減り通して、もう平氣でございます。しかしまだひもじい氣の所爲

「仙人の親方には魚樂が紋のやうなやしるしをつけておかねば、たゞの仙人と間違ふ奴さ。」

かして、わたしが眼にはお前の衣が木の葉煎餅のやうに見えます。」
それより女房仙人、かゝあ仙人、よめ仙人ばゞア仙人うちまじり田を植ゑる。
これまでの辛苦なかゝ筆紙に述べ難し。
俳諧師超波といへるが句に『早乙女の夜も揃うて鼾かな』といへるも、畫のくたびれし樣見えて、まことにその辛苦思ひやらるゝなり。

百姓の仙人、稲を植ゑ、だん〳〵育つに從ひ、天竺にても、雷、風の神、十日五日の風を吹かせて、雨の稲に實を入れんと骨を折る。これ皆金々先生に食はするたゞ一膳の茶漬飯のために、天竺までが大騒ぎ、その辛苦またいかならんや。これは雨を降らせる仕掛なり。斯う叮嚀にかいておかねえと、しめ縄とみる奴さ。

「わたしが身なりは俊寛のおやすときて居やす。」


雷の女房ほどせなし。綿入物をしこれを思へば人間炬燵に首つきり居たりするはあつはしなき者はかけて稲妻を光らせる。
の女房が榮耀食したり、入つて不敵なり。
「最早そろ〳〵秋の風を吹かせよう、したが人間の目にはさやかに見えねども、風の音にぞ驚かれぬるなどゝ、初鰹の身代りにしづめておいた袷の事を思ひ出すであらう。
「これで丁度五十荷汲んだ。どうだのちつとしめりがゆき渡つたかの。」
「太鼓につゞいて吹いたく。」

地の下は濕氣が多いから朔日、十五日、二十八日には蒼朮を焚くなり。それだから地神達は朔日、十五日の禮てもさうじつの御祝儀申し上げますといふ。

天竺でばかり骨を折るかと思へば、地の下にても地神といふものありて、多くの手下の地神を集め、稲に花を咲かせたり、實をいらせたりするから「此所竹田の芝居の緣の下の如し、どこぞの達磨の地口のやうだ。」

「まづ早稲の絲か(ら)さきへひきやれ。」

これ又金々先生に食はする茶漬飯の爲にかく辛苦し給ふなり。されば、かゝる天地の恩を仇に思ふ者は、目前に罰も當る筈なり。

地

地

絲をひきくり給ふ。

天地の惠みにて稻に實いりければ、百姓の仙人これを苅りとりて、籾を臼でひいたり、連枷で打つたり、何やかやして、やう〳〵米になるこれまでの辛苦いかばかりならんや。よく〳〵考へ思ふべきなり。

「金々先生在所へなりのぼりに行つたやうに、此態を見て出來秋の實いりをほめる。

田舍育の仙女、錫むねの柘植の櫛に銀流しのかんざし、手織木綿の柳に蹴鞠、ぐつとはづんだ出立と見える。

「連枷を打つはいゝが、もの前にぶさをうたぬやうに精出したがいゝ。」

汐汲の仙女は、かの茶漬飯の菜になる香の物を漬ける鹽を汲む。

此汐汲といふもの、踊や狂言で見ては松風や村雨などとて至極樂さうに見ゆれども、正寫しの汐汲は殊の外骨の折れるものにて、鹽になるまでは、なまやさしき事にあらず。その辛苦憐れむべし。

「昔は村雨だの、松風だのとて、駄菓子屋の代物を見るやうな、きいた風な名をつけて高慢な顔したと聞いたが、なんとしてこち等がやうな美しい鹽汲があるものか、今時行平さんが居さんしよなら、あつちから握膳で御座んせうなどゝ、▲

▲汐汲だけつがもなくしほやをいふ。

百姓の仙人辛苦して香の物にする大根を作り、汐汲の仙女鹽をこしらへて渡しければ、糠屋の仙人糠を賣りに來たり、樽買ひの仙人樽を賣りに來たりければ、何もかも揃ひて、漬物屋の仙人、かの大根を澤庵につける。これ皆金々先生に食はする茶漬飯のためなり。香の物ばかりも大抵や大方の辛苦にはあらず。

搗屋の仙人、茶漬飯になる米を搗く。これも搗屋の晝飯の菜になる秋光魚の干物から、道を聞かれた時、汗を拭く手拭まで、それ〴〵に入用の品をつくり出すこと、そのさき〴〵は數へ盡し難し。

「仰向いて搗屋秋光魚をぶつり食ひ、とは川柳の名句であつた。」

桶屋の仙人、井戸側をこしらへる。これは飯を焚いたり、茶を煮たりする水の用意にて、別に井戸を掘るつもりなり。その木の餘りにて、手桶、米かし桶などをこしらへる。

「仙人のお頭、帳面につけて一々種數を揃へる。まだ香の物を切る俎板と米上笊、火吹竹と火打箱が出來ない、薪と炭は大抵出來上りだなどゝ顔見世前の芝居の

石屋の仙人茶漬の煮花を煮る石の七輪をこしらへる。

如く大騒ぎなり。

「ひもじい所爲か、
わしがには石屋の玄翁が
薩摩藷のやうに見える奴さ。」

左官屋の仙人
竈を塗る。

「竈の上塗は、恥の上塗を
するよりましだの齒入で
ござる。」

「團扇屋の仙人、七輪の下を煽ぐ澁團扇をこしらへる。これも、籤より竹を切り出して骨となし、紙を漉きて團扇に張り、山より澁をとり來りて上にひく。團扇ばかりも、そのさきざきを思へば幾萬人の手にかゝる事やら知れぬなり。

かくて、金々先生に食はする茶漬飯の道具立あらまし出來上りけれども、いまだ飯を炊き、

煮花

を煮る肝腎の水がなし。それ故仙人のお頭井戸掘の仙人にいひつけ急に井戸を掘らせる。これも井戸掘足代から、鋤鍬の類の道具をこしらへ、その辛苦幾萬人の骨折か、その先々は

數へ盡し難し。

「女仙人、

井戸を掘るを見に來る。これは何のために見に來るか氣が知れず。したが一體此本に女が◆

◆少き故、繪組の愛嬌に見に來たと見える。

龍宮にては此度井戸を掘ると聞き、水を授けんと、龍王自ら立ち出でゝ、多くの鱗類にその用意を申しつける。これまた金々先生一人のために、龍宮までの骨折述べ難し。

龍王の水を授ける所、冠が反吐を吐く様なり。諺に、水は方圓の器物に隨ふと申す事あり。法印の器物は、さしづめ法螺の貝なり。それ故、龍宮で水を授ける手傳は法螺の貝が勤めるなり。

さて何もかも出來上りければ、飯炊の仙女、下女の仙人、丁稚の仙人集りて水を汲み、飯を焚き、香の物を切り、茶を煎じ、膳立をし、さま〳〵辛苦する。

さて此飯炊の仙女、下女の仙人、丁稚の仙人などゝいふものは、至極辛苦するものなり。下女だの丁稚だのとて、別に生るゝ者にあらず、その身貧乏に生れし故、かゝる辛苦の奉公もするなり。これ等も仕合さへよければ、新内ではないが、御新造さんの、奥さんのと人に尊びかしづかれ、上へ見ぬわしで暮す

けれど、ヤレ三介の、ヤレおさんの、ヤレ長松のと、やすくされるは、その身その身の拙き果報故と思ひ、いかなる三庄太夫も憐れみ使ふべき事なり。

はじめちよろ、ちよろ、なかくわつくわつ三尺下つてたか睡といふから、ちとね舟を漕がう。

うに采配をもち臺所を守り給ふ。

かくてやう〳〵一膳の茶漬飯出來上りければ、仙人のお頭これを金々先生に食はする。金々先生は此茶漬飯をこしらへる多くの人の辛勞を目前に見たることなれば、膳に坐りて熟々思ひけるは、わづかに茶漬飯一膳、たつた二タ切れの香の物といへども、幾萬人の手にかゝりけるか數へ盡し難し。まして況んや、美をつくし(た)料理なんどは、幾億萬人の辛苦なるか量り知るべからず。これを思へば、家を作り、着物を着人間一生の品々は皆これ幾萬人の辛苦を積めり。然る時は紙一枚、箸一膳も我が物にて我が物にあらず。皆天地より惠み給ふ所なり。米一粒も、遊んで居て食ふは勿體なきことなり。ア、さうぢやナアと感心の餘り、膝の上へ白き涙

をこぼしければ、お給仕の童子がめつけて、もし飯粒がこぼれましたもいゝ〳〵。

「いかに金々先生、汝生物識にして、定まる渡世もせず、暖かに着、飽くまで食ひ、千萬人の辛苦を費して、ぶらついて居たるは大きなる誤りなり。浮世はいぼ相持だ、なんとこれで茶漬飯を食ふやうにさら〳〵と悟りが開けたであらう。」

と思ひしは夢にて、あたりを見れば、やう〳〵煮花が煮え立ちければ、手をはたとうつて、ア、奇なる哉妙でごぜえす、盧生は粟飯炊ぐうちに五十年の夢を見、われは煮花の出來るうちに千萬人の辛苦を知れり。われ浮世を夢と思ひなして、たゞうか〳〵と暮したるが、今日より心を改め、天地へ恩を報ずるため、一つの渡世をはじめんと、これより無上に稼ぎければ、四五年經たぬうち百萬兩の分限となり、後は夢にあらぬ本間の榮華の身となりけるぞ御詣へ飛び切りのめでたし〳〵。

「アゝ久しぶりで草双紙のしまひが夢だ。」

「こればつかりが眞面目だ。」

京傳作

口上

此度山東京傳儀、紙煙草入新店出し、いろ〳〵新形仕入仕り、下直の品にて、きれ煙草入同様御用ひに相成候様工夫仕り、何卒御贔負御取立一重奉希上候以上

江戸京橋銀座一丁目
京屋　傳藏